

資料

平成 25 年度における生物（動物関係）に関する問い合わせ状況

中島 淳・石間妙子・須田隆一

当所で窓口依頼検査以外で回答した動物に関連する問い合わせの内容について概要をまとめた。平成 25 年度は電話や持ち込み、電子メールによる質問が 68 件であった。問い合わせは県庁各課・保健福祉環境事務所等の県機関からのものが 37 件、市町村からのものが 14 件、一般県民からのものが 13 件、民間業者からのものが 4 件であった。このうち 55 件は不明種の同定依頼であり、その内容は特定外来生物であるセアカゴケグモ疑い種の同定依頼が 27 件、マダニ類疑い種の同定依頼が 8 件となっていた。

[キーワード：衛生害虫、ペストコントロール、オオヒメグモ、タカサゴキララマダニ]

1 はじめに

当所では窓口依頼検査として生物同定検査を実施しているが、それ以外にも日常的に電話や持ち込みによる生物に関する問い合わせに答えることが多い。本報では平成 25 年度に寄せられた質問のうち、動物に関連するものについてその内容をまとめた。

2 方法

動物に関連する各問い合わせについて、依頼元を県、市町村、民間業者、一般県民、その他の五つに区分した。また、質問内容については不明種同定依頼、セアカゴケグモ疑い種の同定依頼、マダニ類疑い種の同定依頼、生物多様性・外来種に関するもの、その他の五つに区分して整理した。

3 結果及び考察

表 1 に平成 25 年度の月ごとの問い合わせ件数を示す。全体で 68 件の問い合わせがあり、もっとも問い合わせが多かったのは 5 月の 16 件で、ついで 4 月と 7 月の 11 件であった。全体の問い合わせ件数は平成 22 年度が 24 件、平成 23 年度が 24 件、平成 24 年度が 57 件であり<sup>1)</sup>、今年度はさらに問い合わせ数が増加していた。

図 1 に問い合わせの依頼元と件数を示す。問い合わせは県関係機関からのものが最も多く、次いで市町村、一般県民、民間業者の順であった。県機関では保健福祉環境事務所からの問い合わせが多かったが、ほぼすべての場合において所管市町村あるいは県民からの質問の仲介であった。また、市町村からの依頼も同様に一般市町村民からの質問の仲介であった。平成 22-24 年度と比較して、今年度は市町村からの問い合わせ件数が多かった。

表 1 各月における内容別の問い合わせ件数

質問内容	月												計
	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	
不明種同定依頼	2	5	0	4	0	1	5	0	0	1	3	0	21
セアカゴケグモ疑い	5	7	4	2	0	0	4	4	1	0	0	0	27
マダニ類疑い	3	2	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	8
生物多様性・外来種	1	0	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	4
その他	0	2	0	1	2	1	0	0	0	0	2	0	8
計	11	16	5	11	3	2	9	4	1	1	5	0	68

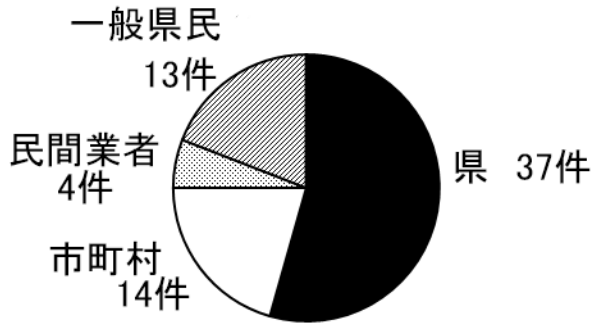


図1 平成25年度における問い合わせ元の件数

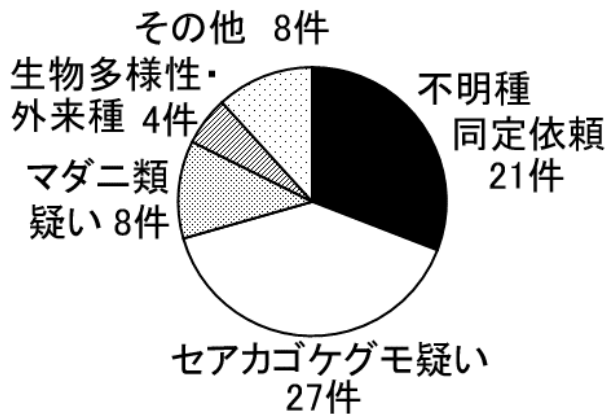


図2 平成25年度における内容別の問い合わせ件数

問い合わせの具体的内容は、セアカゴケグモ疑い種に関する同定依頼が27件と最も多かった(図2)。セアカゴケグモ疑い種の問い合わせは平成22年度、23年度はそれぞれ1件であったにもかかわらず、平成24年度は33件と急増しており<sup>1)</sup>、本年度も引き続き同様の傾向がみられた。セアカゴケグモ疑い種として問い合わせがあった27件のうち、実際にセアカゴケグモであったのは4件のみで、ザトウムシの一種7件(うち1件はゴホントゲザトウムシ)、オオヒメグモ5件、マダラヒメグモ1件、ハンゲツオスナキグモ1件、ヤマトコノハグモ1件、ジョロウグモ1件、コゲチャオニグモ1件、イエオニグモ1件、ズグロオニグモ1件、ウデブトハエトリ1件、ジグモ1件、サラグモ科の一種1件、コモリグモ属の一種1件であった。特にザトウムシ類については背面に赤いタカラダニの一種が付着している個体がセアカゴケグモと間違われるケースが多かった。

また、本年度はマダニ類疑い種に関する同定依頼が8件あった。平成22-24年度にはマダニ類に関する問い合わせ

はなく、これについてはマダニ類が媒介する重症熱性血小板減少症候群ウイルス(SFTS)が、報道等で話題になったことが影響しているものと考えられる。標本あるいは生体を持ち込まれ種まで同定できたものは、タカサゴキララマダニ(2件)とフタトゲチマダニ(2件)であった。



図3 タカサゴキララマダニ(大野城市産)

セアカゴケグモ、マダニ類以外の不明種同定依頼のうち、種まで同定できたのはタバコシバンムシ(2件)、ルリチュウレンジ(2件)、シラホシカメムシ(1件)、アタマジラミ(卵)(1件)、ケブカヒラタキクイムシ(1件)、オオマドボタル(幼虫)(1件)、ルリアリ(1件)、クロバネキノコバエ(1件)、ウズタカダニ(1件)、シマミミズ(1件)、テングニシ(1件)、オオマリコケムシ(1件)、カイツブリ(1件)、ゴイサギ(1件)であった。

生物多様性・外来種に関する質問として、コガタノゲンゴロウの保全、カブトガニの保全に関するもの、外来種であるミシシippアカミミガメの駆除に関するものなどが寄せられた。

専門機関としての当所に持ち込まれるこれらの問い合わせは、県下で実際に起こっている生物に関する問題の現状を知る機会にもなりうるので、今後も記録を集積していきたいと考えている。末筆ながらクモ類の分類についてご教示いただいた独立行政法人農業環境技術研究所の馬場友希博士にこの場を借りてお礼申し上げる。

#### 文献

- 1) 中島淳, 石間妙子, 須田隆一: 福岡県保健環境研究所年報, 40, 137-138, 2013.